

びょういんのえほん

こどもにとって怪我や病気は日常茶飯事で、時には病院のお世話になることもあります。でも知らないところにつれて行かれて何をされるかわからないのは、こわくていやなもの。大人でもちょっと苦手だったりしますよね。今回はそんな不安をやわらげてくれるような、病院をテーマにした絵本をご紹介します。

1冊目は、五味太郎/作『わにさんどきっ はいしゃさんどきっ』です。

虫歯ができたわにさんは、いやいや歯医者さんにやってきます。歯医者さんもまさかわにがやってくると思わずびっくり。ふたりはこわごと治療をはじめます。わにさんも歯医者さんも同じことを言っているのですがどうしてそう言ったのか、ふたりの違いが絵で表現されたゆかいな一冊。わにさんと同じで、ほんとうは遊んでいたいお医者さんも実はこわいひとじゃないのかも、と思える楽しい絵本です。

2冊目は、マーガレット・レイ/文、H.A.レイ/絵『ひとまねこざるびょういんへいく』です。

しりたがりやおさるのジョージは、はめえのこまをキャンディーとまちがえて飲み込んでしまいます。お医者さんに診てもらおうと、おなかからはめえのこまを取り出すために入院することに…。この絵本は、その旺盛な好奇心からいつも大騒ぎを起こしてしまうおさるのジョージのシリーズの一つですが、普段はなかなか目にする事のない病院の中の様子がきちんと描かれているだけでなく、心細くてお気に入りのボールをもってきたり、看護師さんに親切にしてもらっていてもひとりになると寂しくて泣いてしまったりするジョージに共感できる一冊です。

3冊目は、谷川俊太郎/文、長野重一/写真『よるのびょういん』です。

朝からおなか痛かったゆたかは夜になって高熱を出してしまいます。救急車に乗って病院で検査をすると、すぐに手術することになりました。モノクロで構成されたこの写真絵本は、救急搬送に始まり、夜の病院と働くひとたち、心配する両親の姿など緊迫感のある場面に重苦しい印象を受けますが、はじめて乗った救急車にちょっとわくわくしたり、手術台の上ではやっぱりこわくなったりしながらも、翌朝元気になるまでのゆたかの様子が丁寧に描かれていて、最後は安心して読み終えることができます。

図書館には他にも、病院やお医者さんが出てくる絵本がたくさんあります。体調を崩しやすいこの季節、親子で図書館の本をたくさん読んであたたかく過ごしてくださいね。